しもまち キラリ

下関花維新の会

全国のみならず輸入品を含む約20万点の花の中から、国内最大手の花き市場、大田花きが選出する2022年のトレンドを反映する花。その花に、下関花維新の会のケイトウが選ばれ、最優秀賞に輝きました。山口県から史上初の快挙を果たした下関花維新の会とは。

人が作っていない花を作り続ける

花で新風を

今からさかのぼること20年ほど前。海外から入ってくる大量の花や、大規模農家が作る花に押され、下関の花農家3人はどうしたら生き残れるかを考えていました。

そんな時、大田花き市場の方から「大田を日本のアルスメール（世界最大規模のオランダの花市場）のようにしたい。そのためにマイナーな花を作ってもらえないか」という話があったそうです。そこで3人は、花で新風を吹き込み、改革しようと決起し、下関花維新の会が発足しました。

▲受賞したケイトウ。花の大きさは5～8㎝。

現在の会員は8人。コロナ禍前は、花屋やせり人に聞きながら、月に1回勉強会をしてきました。会員同士で栽培方法に干渉しませんが、切磋琢磨しながらいろいろな花を栽培します。

大田へは、小さいアジサイや、プチヒマワリなどから始まり、20年近く一風変わった花を出荷し続けてきました。

そんな中で、花維新の会のオリジナル品種が、その年のトレンドを反映する花「フラワー・オブ・ザ・イヤーOTA2022」最優秀賞に選ばれました。「大田に出入りする花屋さんたち、何百人もの投票で選ばれたのがうれしかったですね」と会員から笑みがこぼれます。

国内最先端の技術

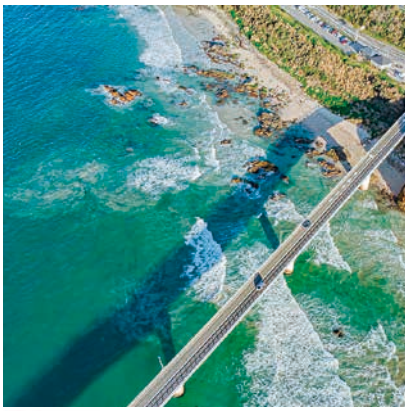
最優秀賞のケイトウ「プティフルーツマーメイドピンク」は小さいサイズで淡くくすんだピンク色。自宅需要に合致し、いろいろな花とも合わせやすいと人気があります。

この花を作った橋本伸宏さ

Linked Instagram インスタグラム

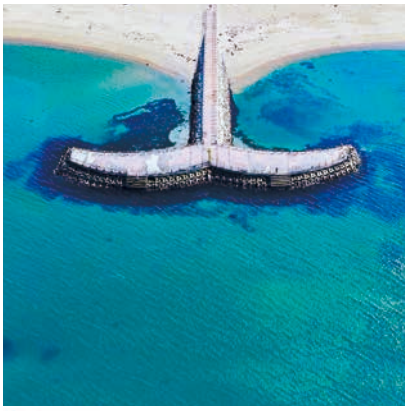
市報×インスタグラム連動企画
フォロワーの皆さんが投稿した下関の魅力が伝わる写真をご紹介♡

Taken From A High Position



@sekkinn360さん

@shimakaze_mackyさん



@jazzcafeさん

Editor's note 編集後記

◆下関市史によると、明治16年に下関測候所が創設。下関は関門海峡を擁し、船舶への気象通報も重要視されていたそうです。西村
◆日曜日の昼下がり、桜が咲き始めた河川敷で、久しぶりに会う友人と食べる、旬の魚を使った料理を、とかいうと考えてくれるかなぁ。宮村
◆トレンドの花を下関から作り出したと聞き、ワクワクしながら取材させていただきました。まさに花維新です！！廣野

豆知識
ケイトウには花びらがなく、色づくのは「がく」です。

▶大田花き市場のある東京まではトラックで運びます。
橋本さんのケイトウは、夏でも水揚げすればシャキッとし、日持ちします。
水に浸けているだけでも、根が出ることもあるのだとか！

◀たくさんタネをまくと、おもしろい花が咲くことがあります。それに印をつけてタネを取り、来年のために保存します。
橋本さんはすべて自家採取したタネでケイトウを栽培しています。

▶ケイトウ「パンプキン」
小ぶりで、ハロウィンの時期に需要があります。
新品種のネーミングは、大田の方と決めています。
「カグヤ」「フェアリーローズ」など、いろいろな品種が生まれています。

ん(写真左)は、花維新の会に入った時をこう振り返ります。「結構変わった品種ばっかり追っかけていたんですよね。『ちょっと作ってみてくれませんか』って種苗会社などから花維新の会にタネが来てたんです。オーストラリアの植物なんか、結構特殊で作り方が分からないから、オーストラリアから栽培方法の本を取り寄せました。翻訳すると、鳥の体の中を通って排出されたタネでなければ芽が出ず、それと同じ環境にするには何%の酢に漬けて、ボイルすると発芽すると書かれていました。みんな熱心で、技術が高くて、すごく最先端な人たちだなと思っていました」

発足時から会員の藤村雅博さん(写真右)は、「会のおかげでいろんな情報が入るようになりました。遠くは札幌の花市場の方が、下関まで来てくれたこともあり、いろんな生産者とも知り合えました」と話します。藤村さんは技術の継承にも取り組んでいて、若い会員に花の栽培方法を教え、一緒に出荷しています。

橋本さんと藤村さんのこれからの目標は「いろいろなものを作り続けること」

20年前から変わらず、下関花維新の会は、人が作っていない花を作り、花で新風を吹き込み続けています。